

北海道の開拓に尽力した平郡島の先人たち

柳井市郷談会 会長 松島 幸夫

1 平郡島の狛犬

柳井市の南部、瀬戸内の周防灘に平郡島が浮かんでいる。深緑が目に鮮やかなその島は東西に長く、島民は東端と西端の一角のみに集落を形成している。

その平郡島の東には早田八幡宮が、そして西には重道八幡宮が鎮座している。神社参道の石段を登りきると、左右に狛犬が出迎えてくれる。邪悪を寄せ付けないように身構える獅子の台座に眼を遣ると「北海道岩見沢 明治十七年開始ヨリ同廿四年 追移住者」と題して、33名の移住者の氏名が刻まれている。明治17年から24年までの間に平郡島から岩見沢へ移住し成功した者たちが金を出し合って、故郷の神社に奉納した狛犬であることがわかる。



北海道移住者から平郡島の神社に奉納された狛犬

2 平郡島からの北海道移住

平郡島民はなぜ大挙して、明治時代に北海道移住をしたのであろうか。当時の事情を紐解いて見よう。

柳井の先人たちが海防策や討幕論を広め、長州藩の武士と庶民が一丸となって幕府を倒し、明治維新が成就した。身分制が崩壊し、民主主義社会の実現に向けてスタートを切ることができた。しかしその一方で維新回天によって、武士は特権を奪われ、秩禄処分によって困窮を極めることとなる。不平武士たちは各地で反乱を起こした。維新を推進した長州でさえ前原一誠らが萩の乱を起こし、薩摩では西郷隆盛が西南戦争を起こした。明治新政権にとって反乱は大きな傷となり、近代化推進の障害となった。武士を廃止して特権を持たない士族としたが、それは名ばかりで、彼らの生活力を軌道に乗せることは緊急の課題であった。その一手として、新天地である北海道への移住を新政府は推進した。

明治14年に移民促進が建議され、財源を確保し、「移民士族取扱規則」を定めて明治17年から移住が始まった。

3 平郡島の士族

移住の趣旨からして、士族でなければ北海道移民にはなれなかった。しかし、江戸時代に平郡島に多くの武士が住んでいたとは、にわかには信じがたい。

それには理由がある。話は戦国時代に遡る。勢力拡大を目論む毛利元就は、大内義隆から政権を奪い取った陶晴賢の大軍を厳島に呼び寄せ、弘治元年（1555）嵐の中を奇襲して勝利を収めた。その際に本土から厳島へ毛利勢の兵員を輸送するために、平郡島などの漁民に漁船で駆けつけるように命じた。元就の命に応じない島が多かったが、平郡島の漁師約100人は毛利兵の輸送を首尾よく行ない、勝利に貢献した。奉公をすれば、当然のこ

ととして御恩がある。

江戸時代になるや、平郡島の100人は家来として抱えるとの沙汰が下る。その任務は、三田尻の御船倉で、舶子（かこ）役をこなすことであった。舶子役とは、船に乗って甲板掃除や帆の揚げ降ろしなどをする仕事である。藩主が乗船する船の仕事は、家来の仕事である。島民から毎年100人を出せとの命令であるから、武士としての人物を特定してはいない。入れ替わり立ち代わりに武士になるという特異な制度であった。維新によって舶子役は廃止になる。明治2年、平郡では長男を中心に100人を選んで士族とした。

4 平郡島の食糧難

平郡島には平地が無く、水の確保が難しく、地味が悪くないために、農作物の収量は少ない。その上に明治16年の干害、17年の風水害によって、想像を絶する痛手を被った。防長新聞は17年6月に、平郡島から目と鼻の先にある周防大島安下庄について「農民漁民は最も困難を極め、日々の食餌に、糠あるいはソバ、麦粕、豆腐粕に柿の葉、ピンピン草を混和して常食となし…」さらに3か月後には「このまま一兩年過ごせば、餓死する者もでらん」と窮状を報じている。

そこに折よく、士族を救う移民話が舞い込んだのである。とくに土地を持たない次男・三男が移民希望をした。ところが長男が士族で、二・三男には移住資格がなかった。そこで長男になりすまし、名を替えて北海道に旅立っていった。

5 開墾の苦勞

5000坪の土地が与えられて喜んだものの、ニレの大樹がどっかと根を生やした原生林で、開墾はままならなかった。手の指が硬直して動かなくなるまで働いた。冬は想像だにできなかった高さに雪が積もった。夏は良いかと思いきや、大きくて強烈なブヨに刺され、顔がブヨブヨになった。マラリヤにも悩まされた。開墾を諦めて逃亡するものも出た。

6 平郡出身者の模範的開拓

平郡島以外からの移住者は、武士として城下町で文武を鍛えてきた連中である。誇り高く、開墾後の豊かな暮らしを弁舌さわやかに述べていた。ところがこれが結果に結びつかない。遅々として開墾が進まない。監視官に叱られてばかりいる。

一方で平郡島において農作業に励んできた平郡島からの移住者は、順調に開墾をしていた。明治18年12月の札幌県報には「周防国大島郡（平郡島）より移住せる二十七戸、従来農業に慣熟し、その志操着実にして、よく稼業に従事するを以て…またよく常に質素節儉を守り、ことに本年は大麦・小麦・雑穀等相応の収穫を得たれば、生計上多少の余裕を生ずべし」と称賛している。

また同県報には、萩城下からの移住者について「長門国阿武郡より移住せし三十四戸は総て農業に慣れざるのみならず、身体柔弱にして労働に堪えざるが如く、課業の進捗取らざるあり。監督者これを査察し責すれば、あるいは土地の卑湿を愁い、あるいは樹林の密林を歎くなど、種々の苦情を唄うものあり」と批判している。岩国など他所の城下からの移住者についても同様の評価をされている。

平郡出身者たちが、北海道岩見沢を創り上げた功績は大である。